

立命館大学附属図書館西園寺文庫蔵「源氏一部之簡要」

中本大
吉岡貴子

立命館大学附属図書館西園寺文庫蔵『源氏一部之簡要』を翻刻、解題を附す。写本。「連歌賦物篇」と合綴。外題「連歌賦物篇 源氏物語一部簡要」(直書)。内題「源氏一部之簡要」。江戸時代写。縦二四・五糎、横一七・一糎。

本書はこれまで『光源氏一部連歌寄合』との関係で注目されてきたものの、近世連歌界における源氏寄合受容の観点からも重要な資料であると考えられる。即ち、一条兼良編『連歌賦物篇』と合綴されていることは示唆的であろう。「簡要」という仰々しい書名 定家の『五代簡要』を髣髴とさせるや、既に指摘されているように、「夢浮橋」巻に続く末尾に『原中最秘抄』に類似する中世秘伝書風の奥書を記すことも興味深い。なお、本書の最大の特徴は島原松平文庫所蔵『豎横和歌集』と一致する巻名歌を掲載する点である。これについては異同も含めて稿を改めて考察したい。

(中本 大)

『源氏一部之簡要』解題

主に収録される寄合語について

『源氏一部之簡要』が掲載する寄合語について、気付いたことを指摘しておきたい。今回指摘する内容は、加藤洋介氏が「二条良基周辺の源氏学 国文学研究資料館蔵『光源氏一部連歌寄合』の紹介と翻刻」

(『国文学研究資料館紀要』第一八号、一九九三・二)において、本書に関して言及された内容と重複する部分がある。

立命館大学西園寺文庫蔵『源氏一部之簡要』(以下、『一部之簡要』と略す)が掲載する寄合語は、一見して『光源氏一部連歌寄合』(以下、『一部寄合』と略す)に掲載されている寄合語から抄出されたと考えられるものの、採録された寄合語には書写の過程で起こったと想定される混乱が看取され、整備された本文であるとは言いがたいのである。

例えば、「若むらさき」巻の「いもら」という語は、『一部寄合』が掲載する「いもか門」の誤写であることは明白である。また、「葵」巻に見える「宮つこ」についても、『一部寄合』が同巻に掲載する「なてしこ」の誤写であろうと考えられる。このような誤写による寄合語の混乱は枚挙に暇なく、そうした混乱のない巻が少ないのが、『一部之簡要』が掲載する寄合語の特色である。

こういった問題に加えて、巻順の混乱(「蓬生」巻、「うす雲」巻に見える混乱・篝火巻の欠落・「紅梅」巻を二回立てている等)や、寄合語の他巻への混入(例えば関屋巻に見える「竹子」は、『一部寄合』に倣うならば蓬生巻冒頭にあるべき寄合語である)も頻繁で、『一部之簡要』本文、特に寄合語については、必ず『一部寄合』と見合わせて、慎重に考察すべきものと言えよう。

しかしながら、『一部寄合』の伝本二種の異同を確認する際、『一部之

『簡要』が重要な判断材料となることを忘れてはならないし、また、次のような例が見えることから、『一部之簡要』が掲載する寄合語の混乱も意味あるものとして捉えなおすことが可能かもしれない。すなわち、『一部之簡要』「早蕨」巻に「古筆」という寄合語が掲載されている。『一部寄合』の中に、「この語と同一あるいはこの語を類推させるような寄合語は掲載されておらず、一方『源氏物語』本文中にも「古筆」やこの語を類推させるような記述は見えない。そつすると、この「古筆」という寄合語は、『一部之簡要』のみに見える独自の寄合語であると考えられる。ところが、『一部寄合』との密接な関連が指摘される『和歌集心鉢抄肝要』所収「源氏寄合」の「早蕨」巻中に、「土筆」(『一部寄合』が同巻に掲載する「つくくし」に対する宛字が)と見えることから、『一部之簡要』に見える「古筆」に関する由来を、ここに求めることができる。『一部寄合』との密接な関連性を指摘される『和歌集心鉢抄肝要』所収「源氏寄合」と『一部之簡要』との間に、このような接点が見出せることから、『一部寄合』が伝来していく過程を考える上で、『一部之簡要』寄合語本文が示唆するものは小さくないと考えられるのである。

次に、『一部之簡要』が寄合語を選別する際の意識について述べておきたい。先にも述べたように、『一部之簡要』が掲載する寄合語は、『一部寄合』が掲載する寄合語から抄出されたものである。その抄出作業が、どのような意識なり認識のもと行われているのかを考えてみたいと思う。

『一部寄合』以降に成立した源氏寄合を収録するものとして、『源氏小鏡』・『連珠合璧集』・『源氏一部抜書』・『源氏綱目』等がある。これらの各書物中には、『一部寄合』と重複する寄合語がいくつか掲載されているものの、『一部之簡要』がこれらの書物をも参照して『一部

寄合』から寄合語の選別や抄出を行った徴証は見出し難い。『一部之簡要』は、『一部寄合』から寄合語を抄出する際に、『一部寄合』以外の源氏寄合収録書は特に利用しなかったと考えられる。

一方、『一部寄合』と『一部之簡要』が収録する寄合語の比較対照により、『一部之簡要』の寄合語抄出の独自性が確認できる。『一部寄合』は、寄合語とともに「源氏物語」本文中の和歌を二十七首掲載してくるのに対し、『一部之簡要』においては、これらの歌は一切掲載されていない。

但し、『一部之簡要』橋姫巻に見える「朝明」「家路もみえす」は、『一部寄合』が掲載する「あさほらけ家路もみえす」(家路もみえす)「ねこしまきのお山はきりこめてけり」から、「あさほらけ」「家路もみえす」の二語を抜粋したものであることが確認できる。また、和歌からの抜粋ではないものの、篁木巻の「龍田姫」「七夕」は、『一部寄合』が同巻に掲載する「たつた姫といはんにもつきなからす七夕のてにもおとるましく」から「たつた姫」「七夕」の二語を抜粋したことがわかる。

このように、『一部之簡要』では、『一部寄合』のように和歌、もしくはそれに准じる長文を掲載することはなく、その中から語句を抜粋するなど、独自の抄出方法が採られているのである。

この他に、『一部寄合』が寄合語として掲載する語句の内、巻名の由来となった語句は、『一部之簡要』では削除されていると考えられる。

具体的に見ていくと、『一部寄合』において見られる、夕顔巻「ゆふかほ」・柳巻「さかき」・花散里巻「花散里」・須磨巻「須磨」・明石巻「明石」・榎巻「あさかほ」・蝴蝶巻「こてふ」・野分巻「野分」・浮舟巻「つきふね」・蜻蛉巻「かけろふ」といった文言は、『一部之簡要』においては削除され、寄合としてあげてこられないのである。(例外として、手習巻「てならひ」は、寄合として掲載されている。)

こうした傾向から、『一部之簡要』は、巻名歌を強く意識していると考えられる。巻名歌に重きを置いたために、『一部寄合』が掲載する二十七首の物語歌は削除され、また、巻名歌中に詠み込まれる巻名同一語は、寄合から削除されたと考えられる。つまり、『一部寄合』に採られ、『一部之簡要』には収録されない寄合語は、本書が掲載する巻名歌を中心とした寄合語の再編作業の中で、削除された可能性が高いのではないかということである。

『一部之簡要』が掲載する寄合語と『源氏物語』本文との関連や、他の注釈書、特に『河海抄』との関係については稿を改めて考察したい。

(吉岡貴子)

注

- ① 『光源氏一部連歌寄合』本文については、二種ある伝本の中、天理大学附属天理図書館蔵本を利用した。必要と判断した場合、国文学研究資料館蔵本における記述を括弧内に示した。天理図書館蔵本は加藤洋介氏「光源氏一部連歌寄合」翻刻、天理大学附属天理図書館本、「愛知県立大学文学部論集」(国文学科編)第四十一号・一九九二・三)における翻刻本文を利用した。
- ② 『和歌集心躰抄抽肝要』(堀部正二氏解説・大学堂書店・一九六九)の影印九五頁二行目。

翻刻

源氏一部之簡要

一桐つほ

なれぬれは君にちきりつ程をへて露のかことをことの葉に置

まうけの君 東宮也 老すけて おさなき人の老すきたるをいふなり

おもやせて

手車 牛にかけぬ車也

鳴こかれ いかなり いかまほしき いさまき處也

おかしき

ゆふ月夜 キヤミの階事也

おたぎ 送る所也 八重むくら

さはらぬ月 むせかへり 人けなき 歌ならぬことなり

人めおとろく 鈴むし くさのもと 絹一下

唐之哥 女之形 人のさか事 唐の王也 文之初 少人の文を言初也

こまゑ うけゑみて 藤つほ さまかへて

そへふし はつもとゆひ

二篇木十四 十二丁オ

紅葉は木々の梢に織はへて錦をあらふ秋の山かせ

すみつきほのか たき物 龍田姫 七夕

菊 心をくれ 空蝉 あなかまかしこましき事也

中川 小柴かき いたつらふし 鬼神 つよき心

かへりみかちに

空蝉 五

秋近き木の下露のみたるは鳴うつせみの涙なりけり

思うつりたる 暮 軒端の萩 むしのいけた

たはむ心なき

夕顔 十

みても猶みまくほしきは夕顔の花やか成し人のふるまひ

人にしむ心 きつね からうす なる神 十二丁ウ

となり 世にしほしめる 忍あ く ふくるふ
はらから兄弟の事也 はと

三若むらさき廿

尋きてゆかりをとへは武蔵のゝ若紫のつゆははかなし
わらはやみ つゝらをり 富士のたけ すゝめ子
やり水 草のむしろ かゝり火 鳥
ふせこ 夕をしらせ 露 鹿のたゝすむ
様事ありかほ いも らと 行来ちかき
霧のまかき 草の戸さし 独ゑみして
心をさなき 手ならひ

四末摘花十

ふみ分る山路の露に匂ひきて末つむ花の色も久しき
くもりかちなる 蓬生の宿 大内山 いさよひの月
松の雪 はやる心ひきあはせ也 むらさき
そらなき 老すかた 陸奥かみ
紅葉賀十

月の夜は紅葉の風にたくひきて錦をしけるをのゝ山里
花のかたはら 三山木 舞の足ふみ かさしのもみち
琴のほそ緒 あらき ひは うつり来る

こまのわたり

五花のえん二

あたに散花のえむをはむすはしを春の別はさても悲しも
戸くち かたらふへき

六葵十一

みしめ縄かけてそいのるあふひ草神の恵をたのむ我恋
おうな車 あぶき 宮つこ 野宮 長月

つかさめし りうたん 咲かほ 空のかみ はなのかみ
夜の衣

七榊葉廿四 野宮

瀧本の神の社のさか木はにゆふしてかけて御被せんとや
野宮 秋の草ゑ おとろへたる 浅茅原
火たきや 小柴かき 物おかしき 松かせ
いたや 黒木の鳥居 すのこ かつら川
大やしま いろ方の月 物見 わかれのくし
すゝか川 あさかほ 別の御襖 心の鬼
いつきの宮 はらきたなははくろの事也 とのい申十三才
雲のはやし

八花ちる里七

吹をくる風のたよりをしるへにて花散里をたつねてそとふ
中川 琴 時鳥 廿日の月 菊の衣
かつらの木 たち花

九須磨六十二

月に行すまのうら人別ぬるかいそへにちかくよる波の音
里はなれ 海つら あまの衣 とのゑすかた
琴 都はなるゝ かり染 旅すかた
おうゑとの 哀みすたき 千さと うへ木
長雨 あしふけるや しらぬ 伊勢人
かとの衣 伊勢嶋 唐幣 よにしほしみて十三才
忘草 伊勢のつかゑ 心つくし 枕そはたつる
手習 枕もつくはかり ところよ ちいさき鳥
かりのつら 月のかほ 月の都 今こゝに
綱手引舟 山さと よのあちはひ しばと云物

ふしの国 友千鳥 住吉の神 若木のさくら

二月廿日 あまの岩屋 いしはし 大宮人

竹あめるかき 囲碁 すこ六 松の柱

馬にいねかう あまのさえつり たかしほ 黒駒あこり物也

みの日のはらい ふて 人かこ 後の山 四方の嵐

ひちかさ雨 あまのふすまふしまわりたる様なるなみなり

十明石^十

秋の夜の月影みえて明石かた真砂にしるく露そ置そふ十四丁オ

須磨 夢のつけ 大やしま 海にます神

みてくら 岩をも山をも 舟出して あやしきあらし

いながら ちかまさりする

十二みをつくし^{十二}

みをかさき水ともいはし身をつくし霞てわたる浦の松かせ

みくにゆつる あねあくはち おもひ子 水鶏

花ちる里 難波の御楔 くるま ひまある也

つかみしかき筆 ねかきかちなる

十二系あはせ

十三松かせ

十四つす雲

関屋^三 十四丁

ふしのねのすそ野ははれて清見かた関やに月の影はやとしつ

栗田山 竹子 しけきなけき

蓬生^三

たれも又哀とやみし蓬生の露のをく野へののやすらひ

心うら 時雨かちなる 住吉の里 春秋のあらそひ

遣水 篝火 ほたる

はる秋もるこしには春あめおしよ
我朝には秋をこしむ也

神も仏もゆるせかし かやり火

十五權^四

たえすまを哀とそみる權の日影をみちて露にしたかふ

夢にみなして しなとの風大風の事也 かれたる花

雪まるはなし

十六乙女^八 十五丁オ

更る夜の月に余波をとめぬるか真木の下戸もさゝぬかりいほ

藤につくる文 紫のかみ つまじるし 友よふ鴈

涙のこひて こすみ薄墨 はゝそ原 われはかほ

十七玉かつら^八

露はまたかつらき山にみたれけり正木色付嵐ふきつゝ

舟子共 かねのみさき まつらの宮 まつのなきさ

ふたとせ 柳衣 あさはなた つくし御しみつり
御し等なり

初音^五

あかすたゝ五月そなけや時鳥心つくしにまちし初ねを

若菜 硯あたり しらか 瀧のよとみ

かさしのわた

胡蝶^四 十五丁

見えわかすこてふは世ゝにたくあつゝ枕ちり敷庭のをちかた

御舟遊 あなたうと 花その 山ふき

蛭^四

立わたり蛭の影のうつるひて水の光のまさる草の井

いつけみ うつしみ かさね斎 あやめ この世なれたる

瞿麦^{十一}

ふしなれて床なつかしき移香をいつより妹か袖に匂ひし

にしかは あゆ 近川 石ふみ みゝかたき

雙六 箔おしまく 遣水 真弓 手枕
琴を枕に

野分^六

あさき瀬の流のわきてさひしきは氷のむすふ冬の山川 十六丁オ

おほはかりの袖 もとあらの小萩 時雨 あしよは車

きし おしほ山

ふちはかま^三

誰か又きてもたをらん藤はかまほころひにけり心やをかまし
め 身にしたかふ あらはしきぬ

卷柱^四

ふちまきはしら波立て宇治川の河霧ふかくみえわたるをや

三瀬川 泪のこひて そらなき ねたむ

十六梅枝^六

月影のかすめるやとの梅かえはおほろけならぬ人そきてとふ

たき物 からうす いましめ くもり日

三川^{水とも} 水うつむや 十六丁ウ

十九藤のうら葉^三

あら磯のきしへの岩に咲藤のうら葉を波のあらふ川哉

もろこいつるはみ衣 いさゝひの水^{さゝれ水}

廿若菜^八

みよしのゝ芳野ゝ草もたえせねは老ぬる身ともわかな摘らん

さゝめ事 心ふかき つらつえ かとくしき

かち人 鞠 小弓 ねこ 手向のきぬ

はこ鳥^{ほろく鳥也} かり弓 かななき^{かみのわき也}

ふしまち月 あつまこと 女は春をあはれみ

男は秋を憐れみ 人の泪をのこふ袖

廿柏木^三

古郷に初雁かねのきなくかし萩か露ふく秋風そたつ

世の中の 今日かあすか おしけなき身 十七丁オ

廿横笛^五

つてにふくさ夜ふけかたの横ふえの音のみにしむ独ねの床

たかはな^{ケイ} 近き林 山にのほれる 夢 夜るかたらふ

鈴虫^五

蓮の宿 蓮の中やとり いのちさへ 心ある人

廿三夕霧^{廿一}

道もみえず末もはるかの夕霧に分まよひぬる秋の山人

松か崎 日くらし かきほのなてしこ 水の音

松のひゞき 馬にいねかふ わかぬれころも

枕の雫 峯の葛原 行人たゝすむ 麻

色こきいね 山田のひた 瀧 いたつら人 十七丁ウ

かけはわりたるひ ふちはかま 山鳥 雲井の鴈

玉はこ物とりして 無音川

廿四御法^四

たくひなき弥陀の御法の舟つけて彼岸ちかくいつか渡らん

山水の住家 薪つきなん きえをあらそふ 露の世

廿五まほろし^一

ふしてみる夢まほろしの世中に驚かぬ身の程も媿し

明暮の夢

廿六雲隠 イ本 には兵部卿

月影の夜半に幾度かわるらん秋はひまなく雲かくれして

廿七匂兵部卿

あたにちる花の香匂ふ深山路もやすらふ程にくるゝ春の日 十八丁オ

をのゝ下葉の色 女 五のさはり

紅梅葉本ノマツ 三

ひちり衣 まほろし 玉の行末

紅梅二

ふところかみ 花やそつらん

竹川四

目をそはめたる 暮 橋うちわたし 人にまけしの心

宇治巻分

一橋姫十一

二なき身を捨ててうはそくの徳をたつねし程の久しき

ひは こと 峯の朝霧 聖にえたる かななき

竹かき 行人 朝明 岩屋 家路もみえす十六丁ウ

藤衣 ひをむしむしゆと云 さかりの衣

二椎か本十三

つとに又木のは散しくしるかもとにかよふ嵐の程そ久しき

中宿 川よりをち 山ふところ 川そひ柳

あしろの屏風 山かつ 峯の古寺 緋の時雨

秋やはかはる むくらの下 朝すゝみ 川つら

かつらひけ人ノヒケノ事也

三総角十一

海土本ノマツに契りむすひしあけまきのとけぬ心はなふもつらめし

庭鳥 山なしの花 三ヶの夜 きりくす

此神の心賀茂也 山鳥 車 つた ぶすま

こと葉の限 あかつきの嵐のひくく十九丁オ

四早蕨五

みし人の契りたえせぬさわらひの折くことにとぶそうれしき

古筆 いはほの森 喚子鳥 泪川 あすのわたりか

五宿木六

誰かみし軒はの梅のやとりきて月も霞て花にしたかふ

朝かう おは捨山 扇 するしの帯 暮 菊柴形

六東屋五

降くらしなめるつらし東屋の敷にかいなきぬるゝすかみの

七夕 うき舟 あつま聲 いかたしめ きつね

七浮舟九

釣をたれて奥にたゝよふ浮舟の波間による淀の岩きし

卯杖つちとも卯の杖を 軒の垂氷 むかはき 小嶋か崎十九丁ウ

ふくるふ ちいさき舟 むくらのかけ 心はしり

ひつしのあゆみ

八蜻蛉六

あたに置露の身にたにかけろふのあるかなきかの世をいとほや

浮舟 鬼 きつね 木たま 老ことは

手にもたまらぬ

九手習十一

御法をまかきとよめ(虫欠) 手習そつき世の中の思出といふ

山ひこ いたち いね 門田 小鷹かり

都鳥 撫子 かり衣 手習 むくらの宿

をちなる里

十夢のつき橋二 二十丁オ

玉つさをかけて心にみし夢のつき橋といひしよはの俤

おもはぬ山

抑夢のつきはしと申事たゝゆめの儀也こと葉のたす

けに橋とをけりもろくの事をたゝ夢にしらせんために

夢のうきはしととめたり源氏一部の事もみな夢と

いはんと也紫式部は観音の化身也人に世間の無常

みな夢なることしらせんと也但此あつむる所は六十帖之

肝要の心を取て連歌のより合をすらくと思よらん

ため也心さしあらんに請文にて是をゆるすへし

但一期に一人之外不可免努々外見あるましく候

可秘々々穴賢々々「二十七ウ」

十六丁裏冒頭の欄外に小書きで「みゆき闕(改行)本ノママ」とある。

(中本大 本学文学部助教授)

(吉岡貴子 本学研修生)